隠岐の島の旅 2023

2023 年 12 月
旅のチカラ研究所　植木圭二

旅友たちと鳥取に行き旬の松葉ガニを食し、日本海を渡り隠岐の島を探訪してきた。船の欠航などのハプニングもありながらも、食に恵まれ、歴史と自然を満喫した旅をしてきた。

第一章　山陰、鳥取

■前夜祭

昨年、私は旬の松葉ガニを本場で食べるために旅友たちと鳥取を訪れ、松葉ガニ三昧の豪華な食事をしてきた。（旅行記「四国中国紀伊の旅 2022」参照）その話を別の旅友たちに話をしたら、是非連れて行って欲しいということになり、今年も行くことになった。

せっかく山陰海岸に行くのだから、私にとって未踏の「隠岐の島」に目が向いた。日本海の島はややシーズンオフにはなるが、カニと隠岐の島を目指す旅を企画することになった

今回、松葉ガニを食べたいというメンバーは、昨年秋に東北秘湯の旅に一緒に行った面々になる。男性陣はヨコさん、ヒデさん、ヨシさん、私の 4 人、女性陣はキキちゃんとチーちゃんの 2 人、男女合計 6 人の楽しい旅友たちだ。（旅行記「東北秘湯の旅 2022」参照）

山陰に向かう前日、キキちゃんが営む料理屋「桔梗屋」がある岡山県津山市を訪れて、紅葉真っ盛りの津山城跡鶴山公園を散策する。

そして夜はその桔梗屋で前夜祭を開く。盛り上がったことは言うまでもない。

そういえば、昨年もカニを食べに行く前夜に桔梗屋で一杯やったことを思い出した。

【津山城跡鶴山公園の紅葉】

■温泉三昧

翌朝、6 人は自家用車 2 台に分乗して山陰に向けて出発する。松葉ガニ三昧の民宿に着く時間から逆算して 3 つの温泉に立ち寄る。その理由は参加メンバーたちが温泉好きということもあるが、松葉ガニをいかに美味しくたくさん食べるかで、腹を空かせる作戦と言っていい。

岡山県北部の足（たる）温泉の「足温泉館」に立ち寄る。小さな川に面した旅館 3 軒の温泉場で、ひなびた感じが良い。

湯から出てきたおばさんが「この湯はスベスベになるよ」と教えてくれる。成分表を見ると泉質は pH9.4 のアルカリ泉、これならかなりスベスベになりそうだ。600 円を払って入浴すると、露天風呂もあってなかなかいい感じの風呂になっている。

【足（たる）温泉のパンフレット】

【三朝温泉の株湯の飲泉所】

鳥取県南部の三朝（みささ）温泉の温泉街の共同浴場「株湯」に立ち寄る。駐車場には飲泉所があって、近所の人が温泉を汲みに来ている。

湧出温度 49℃のラジウム泉で、番台に座るおじさんから「かなり熱いよ」と言われるが、このメンバーは草津温泉など熱い湯も多く体験しているのでその心配はない。

鳥取県東部の岩美町には岩井温泉があり、温泉街の中心にある「ゆかむり共同浴場」に立ち寄る。ゆかむりとは、頭に手ぬぐいを乗せ柄杓で湯をかむるのでそういう名なったと、親切そうな受付のおばさんが教えてくれる。

実は昨年もカニ民宿に行く前にこの温泉に立ち寄っている。

【ゆかむり共同浴場の外観】

■松葉ガニと対面

岩美町は松葉ガニ水揚げ第一位の町で、カニ専門の民宿「さんげんや」がある。昨年も同じ宿でカニを食したが完食できなかった。今回はその反省から温泉をハシゴし、昼食も抜いている。

宿に着いて一服した後、私たちは宿の浴衣に着替えて夕食会場に向かう。浴衣は通常の温泉宿では温泉入浴の正装、言わば制服だが、この宿では戦闘服と言ってもいいだろう。これから始まるカニとの壮絶なバトルにふさわしい恰好で、メンバーたちは意気揚々と夕食会場に入る。

そして料理を見て、彼らは「おおー、これはスゲエー！」、「何だ、こりゃー！」と、私の予想通りの反応をしてくれる。私は彼らのこの反応を見たさにこの旅行を企画したと言っても過言ではない。

大きな食卓はオスの松葉ガニとメスのセコガニの“カニ夫婦”を中心にカニのオンパレードになっている。カニ以外にも地元で獲れた魚、エビ、イカの刺身、カレイの煮付け、貝、茶わん蒸しなどが所狭しで並んでいる。たとえカニが全くなくても充分な料理と言っていいだろう。

【民宿「さんげんや」の夕食とメンバーたち】

昨年同様に、宿の人が「きっと食べきれないでしょうから、お土産に持ち帰ってください」と言ってビニール袋を置いていく。するとヒデさんが「宅急便で送りたい」と言っている。彼は昨夜の前夜祭で飲み過ぎたようだ。

■壮絶バトルが始まる

私たちは、まずは自分の目の前に置かれた料理から手をつける。私は茹でた松葉ガニをある程度食してから子持ちカレイの煮付けに箸をつける。「こんなに大きな子を持っているカレイは都会では食べられないね」と私が言うとチーちゃんとヨシさんが相槌を打ってくれる。

昨年もこの民宿に一緒に来たキキちゃんと私は「カニ雑炊到達」を合言葉にしている。昨年はカニすき鍋の途中でギブアップしてカニ雑炊までたどり着けなかった苦い思い出があり、今年こそは悲願達成を目指して意気込んでいる。

自分の前の料理を半分くらい食べ終えてから焼きガニを焼き始める。焼きガニは、生のカニつまり活ガニを鍋に敷き詰めた岩塩の上に置いて蒸し焼きにする。最初は透明だったカニの身が真っ赤になり、岩塩の風味がカニに移って絶妙な味に仕上がっている。

私は昨年来た時もこの焼きガニの虜になって食べていた。しかしその量は半端ではなく、今年もなかなか食べきらない。

【岩塩の上で蒸し焼きにした焼きガニ】

戦闘開始から約 2 時間が過ぎ、全員がひたすら食べ続けて何とかカニすき鍋のコンロに火を点けるところまでこぎつける。火を点けてやがてカニすき鍋が出来上がり、食べ始めるものの中の具はなかなか減らない。やがて皆の箸は動かなくなっている。マラソンで例えると、35km 地点で足が止まった状態だ。

キキちゃんが「ラストスパート！」と言って力を振り絞って食べ始める。それに触発されて他のメンバーたちも箸を動かし、やがてカニすき鍋の具が無くなろうとしている。マラソンで言えばゴールのある競技場に入ってきたようなものだ。

具を食べ終えて、キキちゃんが「雑炊お願いします！」と元気な声で宿の人を呼ぶ。彼女のその言葉には、これを言いたくて 1 年間精進してきた気持がこもっている。

宿の人がやって来て、「雑炊は何人前にしますか、4 人前くらいですか？」と聞いてくるので「全部で 2 人前くらい・・・」と、先ほどの元気な声はややトーンダウンしている。

雑炊が出来上がり、皆は本当に最後の最後の力を振り絞って食べきる。そして誰もがマラソンを完走したような晴れやかな顔をしている。しかし戦闘服の下の腹はパンパンのようだ。

壮絶な戦いが終わった証として、戦闘服である皆の浴衣はカニの身やカニすき鍋の汁でかなり汚れている。

■鍵事件

もう食べられないと言っていたメンバーたちだが、部屋に戻って反省会と称して再び飲もうとしている。この人たちの胃袋はいったいどうなっているのか。

飲み始めて少しして、ヨコさんが「鍵がない」と騒ぎ始める。

彼はスーツケースに貴重品を入れてスーツケースの鍵を浴衣の懐に入れて夕食会場に行ったと言っている。夕食会場に探しに行ったが、既に全て片付けられている。トイレや洗面所、部屋の中の隅々まで探すが、見つからない。

キキちゃんが「鍵のことなら私に聞いて」と言っている。彼女は東北秘湯の旅で下駄箱の鍵と貴重品 BOX の鍵を紛失して、ひと騒動起こしている。ある意味、その道のベテランだ。

彼女は「最初に捜したところにあるものよ」と悟ったような顔をして言っている。ヨコさんは「浴衣の懐はもう捜したよ」と言っているが、キキちゃんは「浴衣を脱いでみたら」とアドバイスをする。ヨコさんは怪訝な顔をしながら浴衣を脱ぎ始め、間もなくして「あった！」と大声で叫んだ。そしてばつが悪そうに「おみそれしました」と付け加えた。

■フェリー欠航

夜中に雨が降って風が強くなってきたので、翌朝 6 時を過ぎた頃に隠岐の島に渡る隠岐汽船の HP を見ると、本日のフェリーは欠航となっている。

その事実を皆に伝えると、「え一本当？」、「風が強かったからね」などの言葉が返ってくる。島の旅は帰れないこともあるので、ある程度覚悟しておいた方がいいよと事前にメンバーたちには伝えてはいたが、帰れないではなく行けないとは、さすがに虚（きょ）を突かれた思いになる。

朝食を挟んで善後策を協議する。

その結果、先ずは本日の隠岐の島の宿をキャンセルする。さすがに船の欠航なのでキャンセル料金は不要と言われる。そして明日の早い便で島に渡るために本日は港に近い宿を予約する。

■境港

宿を出発し港のある境港市に向かう。私たちがいる岩美町は鳥取県の東の端で境港は西の端なので結構な距離になる。それでも鳥取県は日本一人口の少ない県なので渋滞もない。

鳥取県の人口は約 54 万人で、東京の八王子市よりも少ない。過疎と言ってしまえばそれまでだが、今に始まったことでもなく、抜本的な対策が必要だろう。私にできることは旅行で訪れることくらいだ。

境港の蕎麦屋「伯蕎庵しばた」に入ると、割子蕎麦というものがメニューにある。

店の人に聞くと、日本三大蕎麦の一つの出雲蕎麦を野外で食べるために割子と呼ばれる容器に茹でた蕎麦を入れたもので、割子は三段重ねになっており、ザルではなく底があるので薬味と蕎麦汁を蕎麦にかけて食べる。

私は初めて割子蕎麦を食したが、確かに出雲蕎麦に似ていて旨い。

【右が割子蕎麦　左が蕎麦汁と蕎麦湯と薬味】

食後の腹こなしに近くの水木しげるロードを散策する。私にとっては 2 度目の訪問だが、以前来た時に比べてエリアも広がっておりパワーアップしているように思える。

パワーアップは良いが、水木しげるの代表作「ゲゲゲの鬼太郎」を見て育った人たちは既に高齢者になっており、いつまでもその名前に頼らないといけない地方観光都市の悲哀を感じる。

■運命の宿

本日の宿は今朝予約した「Destiny Inn SAKAIMINATO（ディスティニーイン境港)」は水木しげるロードの近くにある。Destiny Inn を直訳すると“運命の宿”となるが、まさしく運命に導かれて来た感がある。それほど私たちのニーズで合致している。

境港の「みなと温泉ほのかみ」に立ち寄り湯をしてからチェックインする。

大きめな民家を改装した宿で、トイレ、バス・シャワー、キッチンは共通でリフォーム済みのため綺麗で新しい。キッチンには冷蔵庫や電子レンジもある。宿の若いスタッフの話では客室は 8 つあり全て違う造りだという。

私たちの部屋は 10 畳ほどの広さで、壁際にカーテン付きの 2 段ベッドが 3 台あり、中心にテーブルとソファーがあって、テレビとエアコンもある。6 人で部屋飲みをして寝るだけならば全く申し分ない。

私たちはキッチンで簡単な料理を作り、買い込んだ寿司を主食に部屋で夕食にする。フェリーの欠航が功を奏した。

【Destiny Inn の部屋での飲み会】

この宿は素泊まり 1 人 4500 円、手頃な価格のために徹底的に省人化している。HP は日英中韓の言語対応、宿の各所に貼られている説明は全て英文併記してある。ペット同室可の部屋や電動キックボードの貸し出しなど、全く新しいタイプの宿と言っていいだろう。

私は鳥取県の人口を何とかしたいとか、いつまでも水木しげるに頼っているなどとやや上から目線のコメントをしていたが、この宿を体験してそれらは余計な心配だったことに気が付く。

そして私は新しい可能性を感じられるこの宿に出会えたことにいささか感動している。

私の持論で「偶然と感動、期待と落胆」というのがある。それは旅先で偶然に遭遇する感動は大きく増幅され、逆に期待し過ぎると落胆することが多いというもので、旅はこの繰り返しで進行する。偶然泊まったこの宿は明らかに「偶然と感動」と言って良いだろう。

第二章　隠岐、島後

■隠岐の島という島はない

翌朝、目が覚めて隠岐汽船の HP をチェックするとフェリーは運航になっている。

私たちはフェリーターミナルの無料駐車場に自家用車 2 台を停め置いて、人間だけフェリーに乗り込み、荒波の日本海を隠岐の島へと向かう。

恥ずかしい話だが、私は今回の旅行を計画するまで隠岐の島という島があると思っていた。しかし実際は隠岐の島という島は存在しない。

正確に言うと、隠岐の島とは 4 つの有人島の総称で、隠岐の島諸島になる。4 島のうち本土に近い 3 島は、まとめて島前（どうぜん）と呼ばれており、それぞれに島名がある。私が不思議に思ったのは、遠い方の 1 島は島後（どうご）と呼ばれているが、島後には“島”が付いていない。島は一般的に〇〇島と呼ばれるが、島後は島後で、島後島とは呼ばれていない。

さらに分かり難い話がある。2004 年に島後にあった 1 町と 3 村が合併して“隠岐の島町”という町になった。従って島後 1 島を隠岐の島だと勘違いする人も出てくるだろう。

揺れるフェリーの中では隠岐の島の情報を集める。4 島を合わせた人口は約 1 万 8 千人、4 島で一番大きい島後には 1 万 3 千人が住んでおり、その面積は伊豆大島の 3 倍近い。

■絶品の昼食

島後の西郷港に着いて 7 人乗りのレンタカーを借りる。時計を見ると正午の少し前で、港を離れると昼食を食べる食事処もなくなるだろうと、まずは港近くのうどん屋「MS Home」に立ち寄る。まだ真新しい店で、開業して間もないらしい。

店のスタッフに聞くと、「鯖だし藻塩うどん」が良く出るというから注文する。

出てきたうどんは濃厚な鯖の出汁が良く効いており、うどんにしてはやや細い独特の麺と出し汁の絡み具合もちょうど良い。ほぐした鯖の身と海草やネギの薬味も相まって実に旨い。

偶然に入った店にしては抜群の味なので驚くが、これが私の持論の「偶然と感動」なのだと納得する。

割子蕎麦も良かったので、今回の旅は“偶然にして感動の食”に出会う予感がしてくる。おっと、ここで期待し過ぎてはいけない。

【MS Home の鯖だし藻塩うどん】

帰り際に今回会計を担当するチーちゃんが、支払いのついでに若い女性店主らしき人に「店の名前の MS Home とは、どんな意味ですか？」と質問をすると、彼女は「この店はつい最近まで屋台で営業していて、ようやく店を持てたので、MS つまり Mobile Sales（移動販売）が Home（原点）という意味なのですよ」と教えてくれる。

私たちは口をそろえて「素晴らしい！夢が実現して良かった！」と彼女にエールを送る。若者が、いや若者だけでなく老若男女問わず、夢を実現させることに人々は感動し共感する。

その後に私が「島後は、島後島と言わないのですか？」と聞くと、彼女は「生まれてからこの島に住んでいますが、島後は島後で、島後島とは言いませんね」と返ってくる。

■島一周

美味しいうどんと夢の実現というエネルギーをもらった私たちは約 90km の島の周遊道路を反時計回りにまわることにして半日のドライブ旅行に出発する。

港近くの「玉若酢神社」を参拝して、旅の安全を祈願する。拝殿のしめ縄は出雲大社を彷彿させる立派なもので、隠岐は出雲と同じ島根県にあることを再認識する。境内には御神木の八百杉（やおすぎ）があり、樹齢千数百年と書かれている。

【玉若酢神社の本殿と御神木の八百杉】

周遊道路に出てしばらく走り、内陸に入る。「壇鏡の滝」を目指すが、残り 1km のところで崩落のため工事中で通行止めになっている。仕方なく U ターンし海岸線へ戻る。

再び海岸線を走って、「那久岬（なぐさき）」という小さな半島の突端に出る。実はこの岬は意図していない道を走って偶然に来てしまった。つまり間違えたのだが、この景色も素晴らしいから、これも「偶然と感動」だろう。

【那久岬　対岸の陸地は西ノ島】

周遊道路に戻ってしばらく走ると島の西側の油井地区の道路が工事で全面閉鎖になっている。これも崩落で復旧工事している。

ヨコさんとヒデさんが車を降りてなぜか工事業者と話を始める。最初は世間話かと思っていたが、しばらくして私たちの車の通過が許される。この快挙には車内では拍手が起こる。何しろここが通れないとほとんど振り出しに戻ることになるからだ。

パンフレットで必ず出てくる景勝地「ローソク島」を見物する。

しかしあまり感動がない。それはそうだろう、パンフレットのローソク島は夕陽がローソクに火を灯しているような見事な写真で、これはプロのカメラマンが一瞬のチャンスを逃さずに最高の場所から撮影したものだ。

それに対して、今私たちの遥か先にあるローソク島は火が消えたローソクが荒波にただ立っているだけだ。期待して訪れると落胆するという典型的なシーンだろう。

【私がスマホで撮ったローソク島】

【隠岐の島町観光協会の HP のローソク島】

一宮（いちのみや）の「水若酢神社」にやって来る。一宮があるということは隠岐が相模の国や出雲の国と同格の国だったことを意味している。

それゆえ格調高い境内には屋根付きの土俵があって、神事として相撲を取っていることが想像できる。拝殿には出雲大社のようなしめ縄が掛かっていて、その背後には立派な本殿がある。本殿の造りは春日造りに似ているが、説明書きによれば隠岐造りと呼ばれる独自のものだと書かれている。破風の先に付けられた X 字の装飾の千木（ちぎ）、そして屋根の上に横並びに置かれる丸太状の固魚木（かつおぎ）が見事だ。

この神社の歴史は神代の昔まで遡るくらい古いようだが、拝殿と本殿は 1795 年に建造されたというから比較的新しい。それでも江戸時代中期か、重機もない時代にこの離島で建てられたのだから驚きである。

【水若酢神社の拝殿（右）と本殿（左）】

境内には古墳群があり、隣接して洋館の隠岐郷土館、古民家、姿沢闘牛場もあって、一通り観るのに 1 時間以上も費やしてしまう。

しばらく車で走ると、樹齢 600 年で幹回り 9.3m という「かぶら杉」が道路の脇にさりげなく立っている。玉若酢神社のご神木の杉も立派だったが。こちらも見事なものだ。

この島の自然や歴史文化には感服してしまう。

最近の私は島が好きで多くの島を巡っている。それは、島は時間がゆっくり流れているからだ。

島には島時間と呼ばれる独特ののんびりした雰囲気がある。そしてその島時間以外に、島は本土から離れているので近代化や都市化がゆっくり進む。そのため昔のものが残っている。祭などの古い伝統文化や生活習慣、さらに自然も、古き日本を感じることができる。

■隠岐プラザホテル

島後をほぼ一周して今宵は港近くの「隠岐プラザホテル」に泊まる。2 連泊の予定だったが、フェリーの欠航で 1 日目をキャンセルした。

このホテルの部屋の鍵が面白い。

フロントで鍵を渡された時は 1 部屋で 1 つの鍵だったが､それは磁石で付いていて 2 つに分けることができる｡それだけでなく男性陣と女性陣の 2 部屋で鍵は 2 本 2 本、計 4 本になるが、この 4 本は別の組み合わせでは付かないようになっている。複数の磁石の N 極と S 極の組み合わせによるもので実に良く工夫されている。

【隠岐プラザホテルの分けられる鍵】

このホテルは高級なホテルだが、それでも夕食に松葉ガニは登場しない。それは隠岐で獲れる“隠岐松葉ガニ”が簡単に手に入らないからだ。一般的なカニ漁は底引き網で獲るためカニが傷つき砂混じりになるが、隠岐の島ではカゴを海底に沈めて持ち上げて獲る“カニかご漁”なのでその心配がない。だから希少価値で極めて高価になる。

朝食は焼き魚や刺身、名物の“もずく雑炊”が並ぶ。やはり雑炊が出てくると嬉しい。

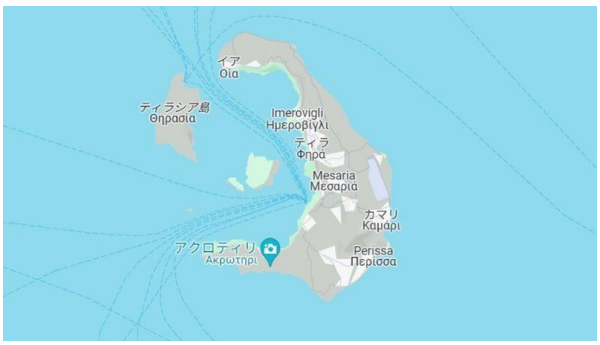
第三章　隠岐、島前

■島前はカルデラ火山

島後は丸い一つの大きな島だったが、これから渡る島前は 3 つの島からできている。そしてこれらの島を上から見るとカルデラ火山だったことが直感的に理解できる。

同様なカルデラ火山の島として世界的に有名なのはギリシャのサントリーニ島で、私もこのメンバーたちも地球一周の船旅でサントリーニ島を訪れたことがある。

【島前の 3 島】



【サントリーニ島】

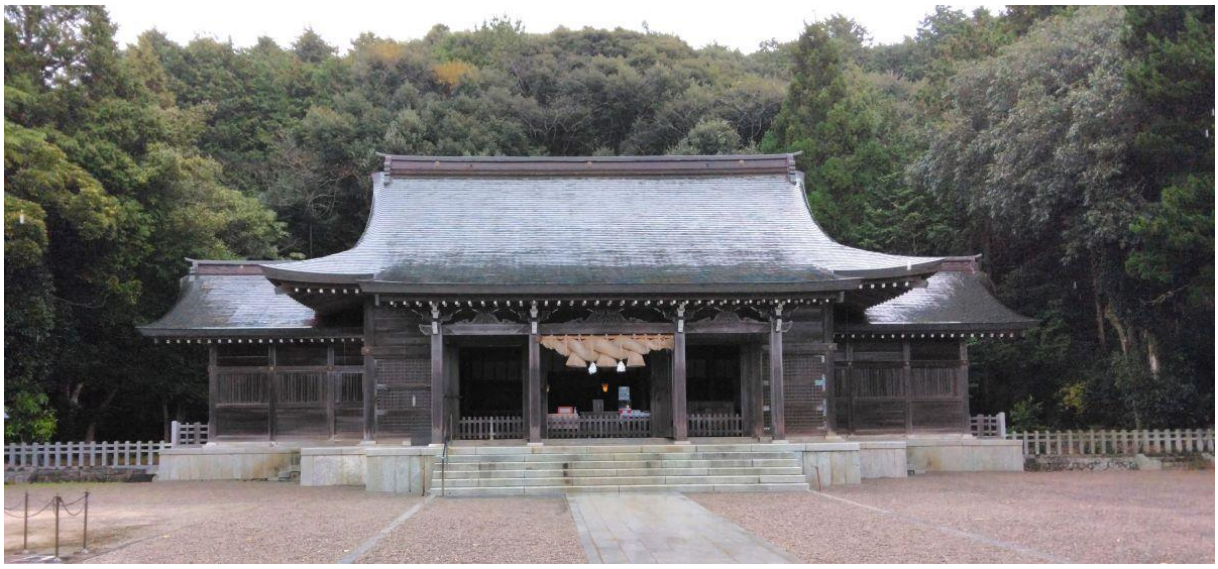
■中ノ島

島後からフェリーに乗って島前の中ノ島の菱浦港に入る。中ノ島は海士（あま）町という一つの町で、人口約 2400 人、後鳥羽天皇（当時は上皇）が流された島として有名である。

後鳥羽天皇は新古今和歌集の編纂でも知られる歌人だが、武人でもあった。鎌倉幕府に逆らい兵を挙げて敗北し、1221 年に流された。そして 19 年後にこの島でその生涯を終えた。

私たちは路線バスに乗って後鳥羽天皇を祀る「隠岐神社」を訪れる。この神社は昭和になって創建されたもので、流されてから 700 年以上も名誉回復がなかったことを意味している。

ここにも立派な屋根付きの相撲の土俵がある。相撲は神事として古き日本の習わしなのだろう。



【隠岐神社】

なぜ中ノ島に流されたのかというと、当時の中ノ島は隠岐の中でも裕福な島で、村上家が支配していた。その村上家に後鳥羽天皇が預けられる形で流された。現在も中ノ島には水田があり稲作もしている。私は同サイズの離島を訪れることが多いが、水田がある島は極めて珍しい。

村上家資料館を訪れる。若い女性スタッフが隠岐の歴史文化を詳しく話してくれる。

ついでに島後にはなぜ“島”がつかないのか聞くと、島後は島後だとの答えだった。

後鳥羽天皇だけでなく、後醍醐天皇もその約 100 年後に隠岐に流された。しかし 1 年後に島を脱出している。この 2 人の天皇を混同することも多い。

■隠岐牛の昼食

港に戻り、「島生まれ島育ち隠岐牛店」で昼食をとる。

私たちは隠岐神社に行く前に観光協会に荷物を預けた。その際に親切に対応してくれたお姉さんが「この店の隠岐牛が美味しいですよ」と言っていたので、「偶然と感動」の予感がして店を予約していた。

ランチで出てきた隠岐牛は柔らかい肉で実に旨い。

店の人の話では隠岐は牧畜が盛んで、雌牛が子を産み、成牛になる前に売却する。それを日本各地のブランド牛の産地で成牛まで育てれば〇〇牛になるので隠岐はブランド牛の源だという。

そしてこの店の店名「島生まれ島育ち隠岐牛店」の意味も理解できた。

【隠岐牛のランチ】

2000 円のランチなので、そんな高級肉ではないにしても B4 以上の肉だろうと推測する。

牛肉のランク付けはよく耳にするが、意外に知っている人は少ない。A～C が歩留等級、5～1 が肉質等級で、この 2 つを並べて表記し A5 が最上位ランクになる。

歩留等級（A～C）は 1 頭の牛から取れる食用肉の割合で、B が平均で A はたくさん取れるから生産性が高いことを意味する。これは基本的には生産者のための指標で消費者には関係ないが、たくさん肉が取れるということは牛が肥えていることになる。

肉質等級（5～1）は脂肪の量や質、色を評価するもので、味を保証するものではないが、柔らかさなどを客観的に評価したもので味にも影響する。

そしてこれは日本独自の牛肉評価なので、輸入牛肉には適用されない。

■西ノ島

西ノ島の別府港へ内航船でやって来る。内航船とは島前の 3 島がその 3 島間を行き来するために共同で運行させている小型船で、1 回 300 円で利用できる。

そして島内観光のために観光タクシーを 2 時間チャーターしており、港から「赤尾展望所」、それから「摩天崖（まてんがい）」に行く。

【赤尾展望所】

【摩天崖】

その後に「通天橋展望台」に行く。展望台への道は車通行止めになっていたが、運転手が観光協会に電話して了解をもらい、持っていた合鍵で解錠して中に入る。

隠岐の島の通行止めは単なる目安か。いやフレキシブルな運用と言った方が良いだろう。

【通天橋展望台からの眺め】

観光タクシーの運転手は博学でいろいろなことを教えてくれる。

隠岐はどの島でも水が豊富で、なぜこの小さな島で水が豊富なのか。それは「淡水レンズ作用」だという。その原理は透水性の岩石からできている島の地下では雨水がしみ込んだ淡水と海水とが存在するが、比重の差から軽い淡水が海水の上にレンズ状に浮いて、地表に湧出する現象だと教えてくれる。

西ノ島の人口は約 2500 人、そのうち約 700 人が移住者で、移住者の多くは“巻き網漁法”に従事しているという。それは隠岐の伝統漁法で、魚を集める船、獲る船、運ぶ船というように役割分担をする漁法だと教えてくれる。

島の新参者は、まずは皆で協力して事を成すのが第一ということなのだろう。

この島はパッと見ると 2 つに分かれているように見える。実は 1915 年に運河を掘り、これによって外輪山の外の海とカルデラの中の海を最短距離で船が往復できるようになったという。この運河のことを聞いて私は対馬の運河を思い出した。対馬も一見して 2 島に見える。

私は今まで観光タクシーをあまり利用してこなかった。しかし今回利用して、小回りが効き有益な情報をいろいろ教えてもらえて、短時間で効率的に島を巡ることができることを知る。さらに通行禁止も入ることもできる（？）。実に頼もしい。

■島後問題の展開

博学な運転手にも、なぜ島後は“島”がつかないのかを聞いてみる。

答えは今まで聞いた人たちと同じだが、島後は町村合併で隠岐の島町を名乗ったことが他の島からすると違和感があると言っている。4 島一括で隠岐の島だったのに、島後が隠岐の島町を名乗ることに異議があるようだ。

この話を聞いて、私はマケドニア呼称問題を思い出した。

それは 1991 年ユーゴスラビア社会主義連邦共和国が解体して 6 つの国に独立したことに起因する。それまでは連邦国家内にマケドニア共和国という国があったが、内部共和国だったので問題にならなかった。しかしそのままの名称で独立したのでギリシャからクレームがついた。古代マケドニアはあの有名なアレクサンダ―大王の国で、その領土の半分以上は現在のギリシャにあるからギリシャこそがマケドニアの継承国だと自認していた。結局この問題は 2019 年にマケドニア共和国が“北マケドニア共和国”に国名変更して決着した。

これと同じ決着ならば、“北隠岐の島町”になるのか。

■古風の宿「孤島」

内航船で 3 島の中で一番小さい知夫里島の知夫村来居（くりい）港へやって来る。

本日は古風の宿「孤島」に泊まる。築 60 年の民家でトイレだけは改装してある。すぐ目の前に海が広がり、若い独身女性が 1 人でやっている宿で、インターネットでの評価は高い。

電話予約の時に部屋数を聞くと、6 畳間と 8 畳間の 2 間で、8 畳間に行くには 6 畳間を通らないと行けないので他の宿への分泊を勧められたが、私はそれでも構わないと言って予約した。

宿に着くと、別に 4 畳半くらいの板の間の部屋を用意してくれていた。

宿の HP では薪を割って風呂を沸かす体験や、共同調理もできると書かれているが、早い話、手が足りないので手伝って欲しいということらしい。

私とヨコさんで風呂焚きを担当する。そうは言ってもチャッカマンは燃料切れで、薪は太い廃材ばかりで焚き付け用の細い薪がない。それでも私が何とか火を点けてヨコさんが薪割をする。何十年ぶりかの作業だが、久しぶりの風呂焚きも非日常なので楽しい。

女性陣は台所を手伝っている。こちらは非日常ではなく彼女たちにとっては日常で、キキちゃんはプロなので手際が良く、チーちゃんは片付けが早いから散らかっていた台所が瞬く間綺麗になる。

【孤島の部屋（8 畳間）】

【風呂焚き】

寒いので、こたつとエアコンを同時につけたらブレーカーが落ちて真っ暗になる。するとヨシさんが暗い中を電気製品の電源を切り、ヒデさんがライト片手に椅子の上に乗ってブレーカーを上げる。そして電子レンジを使うとまたブレーカーが落ち、同様な手順で再度復旧させる。

そんなことを 3～4 回繰り返してようやく夕食の支度が終わる。

夕食では女性陣が調理を手伝った料理が食卓に並ぶ。
そして「刺身が届きました」と言って地魚の刺身が出てくる。この島には魚屋がないと内航船で一緒になった人から聞いていたが、どこから仕入れたのだろうか。まあ、いいか。

夕食を手伝ってもらったお礼に宿主の彼女が自家製の梅酒を振舞ってくれる。梅酒をいただきながら、プロのキキちゃんが娘に伝授するかのように梅酒の秘伝をアドバイスしている。

それにしても食卓の電気が暗い。電灯は食卓の真上ではなく、少し外れた場所にある。電気メーカーに勤めていたヒデさんは何か言いたいことがありそうだ。

私たちが寝る時の寒さ対策にと、宿主の彼女が湯たんぽに熱いお湯を入れ始める。今では見かけることもない湯たんぽに私たちの目は釘付けになり、子供の頃の懐かしい思い出が蘇る。

■旅行企画の肝とは
夕食も終わり、いつものように夜の宴になる。宿主の彼女は別棟に引き上げており、ここにはいない。それゆえ話題はこの宿のことに及ぶ。

この宿は実に不思議な宿だ。
不便な離島にある祖父母の家に泊まるような感覚でありながら、境港の Destiny Inn のような現代風の要素もある。しかし練度はそんなに高くない。つまりアマチュアっぽい。
私はこの宿にある種の期待をして来た。それは私の持論からすれば、期待と落胆か・・・。

しかしよくよく考えると、私は一体何を期待して来たのか。
最初は快適な宿を期待していたと思っていた。それゆえメンバーたちと、あそこをこう直せば良くなるとか、こういうシステムにした方が良いなどと話し合った。勝手な話だが 1 週間程泊り込んで快適な宿にする計画まで出てきた。
だが、果たして宿泊客はそのような快適さを求めてこの宿に来るのだろうか。

滅多に旅行をしない人にとって快適な宿は必須だろう。日常生活を脱して快適な宿に泊まりたくて旅行する人は多い。そんな人は旅行の目的を快適な宿に泊まることを第一位にすればよい。しかし今回の私たちの旅はそれを目的としておらず、少なくともその優先順位は高くはない。
今回の旅で最も快適な宿と言えば島後の「隠岐プラザホテル」だが、正直言ってあまり印象に残っていない。カニ民宿や Destiny Inn は快適とは言い難いが、尖って特徴ある宿なので非常に印象に残っている。そしてこの孤島という宿も印象に残るだろう。

私は「旅は“思い出産業”である」という言葉が気に入っている。旅という産業の最終生成物は思い出で、そして人々はその思い出を糧に現実社会を生きていく。
つまり思い出に残ることは旅にとって非常に重要なファクターになる。

しかし旅とは不思議なもので、全てが尖った宿では疲れてしまう。あまり印象に残らなくてもほっと一息つけるような宿も必要なのである。それが今回の旅では隠岐プラザホテルだったのかもしれない。あのホテルでゆっくりできて、旅全体のバランスが整った。

それはいわゆるメリハリというもので、そのメリハリがないと尖った宿の印象も、旅の醍醐味も薄れて、疲れだけが残る旅になるから不思議なものだ。

私は、旅行企画の肝とは“目的”と“メリハリ”だと悟った気になる。

■帽子事件

翌朝、宿を出る際にヨコさんが「帽子がない」と騒いでいる。昨日は帽子をかぶって宿に入ったが、宿を出ようとして帽子を探すが見つからないと言っている。

全員で帽子探しをする。しかし見つからない。

鍵と同じように「最初に探した場所は？」と聞くと、衣紋掛けだという。

8 畳間には最近ではあまり見かけない衣紋掛けがあって、私はとても懐かしく感じて宿に着いてからじっくりと見ていたが帽子はなかったような気がする。

結局、帽子を諦めて私たちは宿を出る。

■知夫里島は絶景

旅の最終日、本日も観光タクシーを頼んであり、宿まで迎えに来てもらう。

まずは「アカハゲ山展望台」に行く。昨日の西ノ島の観光タクシーの運転手が外輪山とカルデラは知夫里島からの眺めが最高だと教えてくれたが、まさしくそのとおりで、展望台から一望できる景色は絶景だ。

対岸の左と中央が西ノ島、右には中ノ島が見えて、中ノ島の後ろには島後が見える。この光景を目の当たりにすると、後ろの島が“島後”と呼ばれることも何となく理解できる。

【アカハゲ山展望台からの眺め　対岸の左と中央は西ノ島、右が中ノ島　（2 枚の写真を合成）】

サントリーニ島と比べてもこちらの方が素晴らしいと昨日の運転手は豪語していたが、それは決して嘘ではなかった。

確かに地形だけで比べれば、こちらの方が勝っていると私も思う。しかしサントリーニ島は地形だけでなく、崖の上にある白い家々がとても特徴的で“絵”になっている。大型客船もまたその景色に溶け込んでいる。それらも含めて比べるのには無理があるように感じる。

【サントリーニ島　2016 年地球一周の旅船で撮影】

この島には多くの牛が放牧されている。例の淡水レンズ作用で山でも水が湧くからだと本日の運転手も教えてくれる。

知夫里島は知夫村の 1 村の島で、人口約 600 人、牛も約 600 頭いる。さらにタヌキが約 2000 匹もいるので、至るところで牛とタヌキの共演を見ることができる。

「隠岐知夫赤壁（せきへき）」は高さ 200m の巨大な岩石の壁で、長さは約 1km も続く。日本海の荒波で岩肌がえぐられ、露出した岩が鉄分を多く含むために酸化して赤や茶色に変色した。

赤壁は“あかかべ”とは読まずに“せきへき”と読む。国の名勝天然記念物に指定された際に中国の故事にある“赤壁（せきへき）の戦い”にちなんで名付けられたと運転手が教えてくれた。

【隠岐知夫赤壁】

全校生徒 40 人という「知夫小中学校」の脇を抜けて、「河井の地蔵の湧水」立ち寄る。淡水レンズ作用で湧いている水を頂く。

フェリーターミナルの横にある内航船の船着き場には小さな待合室がある。実は昨日私たちは民宿からの迎いが来るまでこの中で少しの間待っていた。
ヨコさんが「ここに停めて」と言うので、観光タクシーは待合室の前に停まる。ヨコさんが車から降りて待合室の中に入り、ニコニコした顔で戻って来た。そして彼の頭にはなくしたと言っていた帽子が乗っていた。

第四章　旅を終えて

■島後問題の最終章
隠岐の島からフェリーで境港に戻り、大阪まで車で送ってもらい、帰りの新幹線の中で島後問題について私なりにつらつら考えた。

まず私は日本で、“島”が付いていない島が他にもあるのだろうかを考えた。
すると対馬が直ぐに私の頭の中に浮かんだ。確かに対馬には島が付いていない。たまたま読みが“つしま”だが、島という漢字ではない。

そして私はスマートフォンを取り出し、国土交通省の離島振興課の HP を調べた。その結果、やはり島後には島がついていない。ところがその HP では対馬は対馬島になっている。他の島も調べたが、島後以外は全て島がついている。つまり日本政府の見解として島後は日本で唯一“島”がつかない島ということになる。
これが島後に島が付いていない理由にはならないが、少なくとも日本政府はそう決めている。

本州や九州も国際的には島だが、日本人は島と呼んでいない。島とは海に囲まれた“小さな陸地”で、どちらかと言えば見下した言い方に聞こえる。だから日本人は自らが住む陸地を島と呼ぶのはプライドが許さなかったのかもしれない。
これと同じように島後は、島後に住む人々も本州に住む人々も“島”とは呼びたくない特別の存在だったのかもしれない。
天照（アマテラス）に日本を譲った大国主（オオクニヌシ）を祀る出雲大社と同じしめ縄や、隠岐造りという独自の本殿を見て、私は日本のルーツが隠岐の島それも島後にあるのかも知れないと思うようなった。

■反省
今回の旅行の反省点は、何と言っても「おき得乗船券」だろう。
この乗船券は隠岐汽船が発行しているもので、島内の指定された宿に泊まり指定された体験をするとフェリーの片道料金（3510 円）が無料になる。もちろん私はこれを知っていたので、指定

宿に泊まり指定体験の観光タクシーを利用した。
しかし利用には 3 日前までに事前申請が必要だということを見逃しており、そのことを前日に知ったが後の祭りだった。知らなかったならばまだしも、これは痛恨の極みと言っていいだろう。
この旅行記を読んで隠岐の島に船で渡ろうと思っている方は、是非ご注意いただきたい。

■温泉評価委員会
私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になるが、今回は旅が終わった後に私 1 人で評価した。
今回宿泊した宿は温泉ではなく入浴していない宿もあり、温泉評価にはならないが宿の記録として残すために該当項目のみ評価し、総合点の算出はしない。立ち寄り湯は泉質のみ記載する。
評価は 5 段階でその基準は、5 は驚き感動、4 は普通に良い、3 は可もなく不可もない、2 は普通に悪い、そして 1 は失望落胆としている。

「津山タウンハウス」は泉質-、風呂-、料理-、コスパ 5、サービス 3、建物・部屋 3、立地環境 4 で、コスパが高い理由は朝食付 5800 円、24 時までアルコール飲み放題が凄い。
「さんげんや」は泉質-、風呂-、料理 5、コスパ 5、サービス 3、建物・部屋 3、立地環境 3 で、この宿はカニ料理が特出しており、ホテルで同程度の料理を食べると 2 倍くらいするためコスパも高評価になった。
「Destiny Inn SAKAIMINATO」は泉質-、風呂-、料理-、コスパ 5、サービス 3、建物・部屋 5、立地環境 4 になった。建物・部屋は感動したので高評価にした。
「隠岐プラザホテル」は泉質-、風呂 4、料理 4、コスパ 3、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 4 で、平均的に高評価になった。
「孤島」は泉質-、風呂 2、料理 3、コスパ 4、サービス 2～5、建物・部屋 2～5、立地環境 5 になった。評価 2～5 は平均値では 3.5 だが、視点や人によって評価が別れそうで苦肉の策になる。

足温泉「足温泉館」は湧出温度 39.8℃、pH9.4、泉質はアルカリ性単純温泉になっている。
三朝温泉「株湯」は湧出温度 39.2℃、pH7.3、泉質は低張性単純高温泉になっている。
岩井温泉「ゆかむり共同浴場」は湧出温度 49.8℃、pH7.1、泉質はカルシウム・ナトリウム-硫酸塩線になっている。
境港の「みなと温泉ほのかみ」の湧出温度と pH は不明、ナトリウム-塩化物泉の低張性アルカリ泉と書かれているので湧出温度は低く、pH は 8.5～10 と推測できる。

■旅の記録
実施は 2023 年 11 月 26 日（日）～12 月 1 日（金）の 5 泊 6 日、その行程を示す。
・1 日目　早朝に自宅を出て新幹線に乗り、11 時に大阪の島本駅で 5 人待ち合わせ、
自動車 2 台に分乗し岡山県津山市へ、津山城を見学、料理屋「桔梗屋」で前夜祭、
ビジネスホテル「津山タウンハウス」チェックイン
・2 日目　9 時に宿を出発、6 人で「津山まなびの鉄道館」見物、岡山県の足（たる）温泉の

「足温泉館」で入浴、鳥取県三朝（みささ）温泉「株湯」入浴、昼食を抜き、
鳥取県岩美町の「ゆかむり共同浴場」で入浴、民宿「さんげんや」チェックイン

・3 日目　朝 6 時過ぎ隠岐の島行きフェリーの欠航情報が入り、善後策を協議、
この日の隠岐の島の宿をキャンセル、境港の宿「Destiny Inn SAKAIMINATO」
を予約、9 時に宿出発、境港の「伯蕎庵しばた」で昼食、水木しげるロード散策、
「みなと温泉ほのかみ」で入浴、食料を買い込んで宿にチェックイン

・4 日目　7 時 40 分に宿を出て、島根県七類（しちるい）港に 2 台の車を置き、
9 時発のフェリー乗船、11 時 35 分に隠岐の島町西郷港に入港、
レンタカーで島内ドライブに出発、「玉若酢神社」参拝、「八百スギ」見物、
昼食はうどん屋「MS Home」で食べて、島を反時計回りで回り始め、
海岸線から「壇鏡の滝」を目指すが通行止めで U ターンし再び海岸線へ、
「那久岬（なぐさき）」を見物、油井地区の道路が工事で全面閉鎖、交渉して通過、
「ローソク島遊歩道」から「ローソク島」見物、「水若酢神社」参拝、周辺施設の
「古墳群、からむし 2 世号、隠岐郷土館、都万目の民家、姿沢闘牛場」を見物後、
「かぶら杉」、「浄土ヶ浦」と「崎山岬」を見物、
17 時「隠岐プラザホテル」にチェックイン

・5 日目　7 時 50 分宿を出発、8 時 30 分発フェリーで中ノ島海士町菱浦港 9 時 40 分入港、
路線バスで「隠岐神社」へ行き参拝、「後鳥羽院資料館」、「村上家資料館」見学、
徒歩で港へ戻り「島生まれ島育ち隠岐牛店」で昼食、内航船で西ノ島別府港へ、
別府港で観光タクシー乗車し、「赤尾展望所」、「摩天崖」、「通天橋展望台」見物、
港に戻り内航船で知夫里島来居（くりい）港へ渡り、
古風の宿「孤島」へチェックイン

・6 日目　9 時観光タクシーが宿に来て、「アカハゲ山展望台」、「隠岐知夫赤壁」見物、
「河井の地蔵の湧水」立ち寄り港へ、10 時 55 分発フェリー乗船、
13 時 20 分境港に戻り、港からタクシー1 台で七類港へ車を取りに戻り、
境港で解散、私を含む 4 人は、津山経由で大阪へ、私は新幹線で帰宅

自宅を出てから帰宅までの総費用は 1 人あたり約 11 万 6400 円になった。正確にはメンバーは日本各地から集まっているので、交通費が異なり、上記費用は私の支出額になる。以下、その詳細を記す。

・宿泊費 60211 円、詳細は以下

津山タウンハウス	5800 円	
民宿さんげんや	27249 円	（25000 円＋消費税＋ビール 2 本/6）
ディスティニーイン	4666 円	（素泊まり、駐車場代込み）
隠岐プラザホテル	14996 円	（2 食付料金＋夕食時の飲み物）
孤島	7500 円	（2 食付料金）

・交通費　42346 円、詳細は以下

フェリー	8620 円	（本土→島後、島後→島前、島前→本土）
内航船	600 円	（中ノ島→西ノ島、西ノ島→知夫里島）

レンタカー	1559 円（レンタカーとガソリン代 9356 円/6）
バス	200 円（菱浦港→隠岐神社）
観光タクシー西ノ島	2867 円（2 時間 17200 円/6）
観光タクシー知夫里島	1500 円（1.5 時間 9000 円/6）
高速道路とガソリン代	約 7000 円（2 台分を 1 人分換算）
自宅～大阪	約 20000 円（新幹線、ジパング倶楽部利用）

・昼食代 4165 円、詳細は以下

境港「伯蕎庵しばた」	850 円（割子蕎麦）
島後「MS Home」	850 円（鯖だし藻塩うどん）
中ノ島「隠岐牛店」	2285 円（ランチ 2000 円＋ビール）
帰りのフェリーのパン	180 円

・その他、6680 円、詳細は以下

立ち寄り入浴	2180 円（4 軒分　足、三朝、ゆかむり、みなと）
見学料	500 円（後鳥羽院資料館、村上家資料館）
飲み物代、つまみ等	約 7000 円（1 人分に換算）